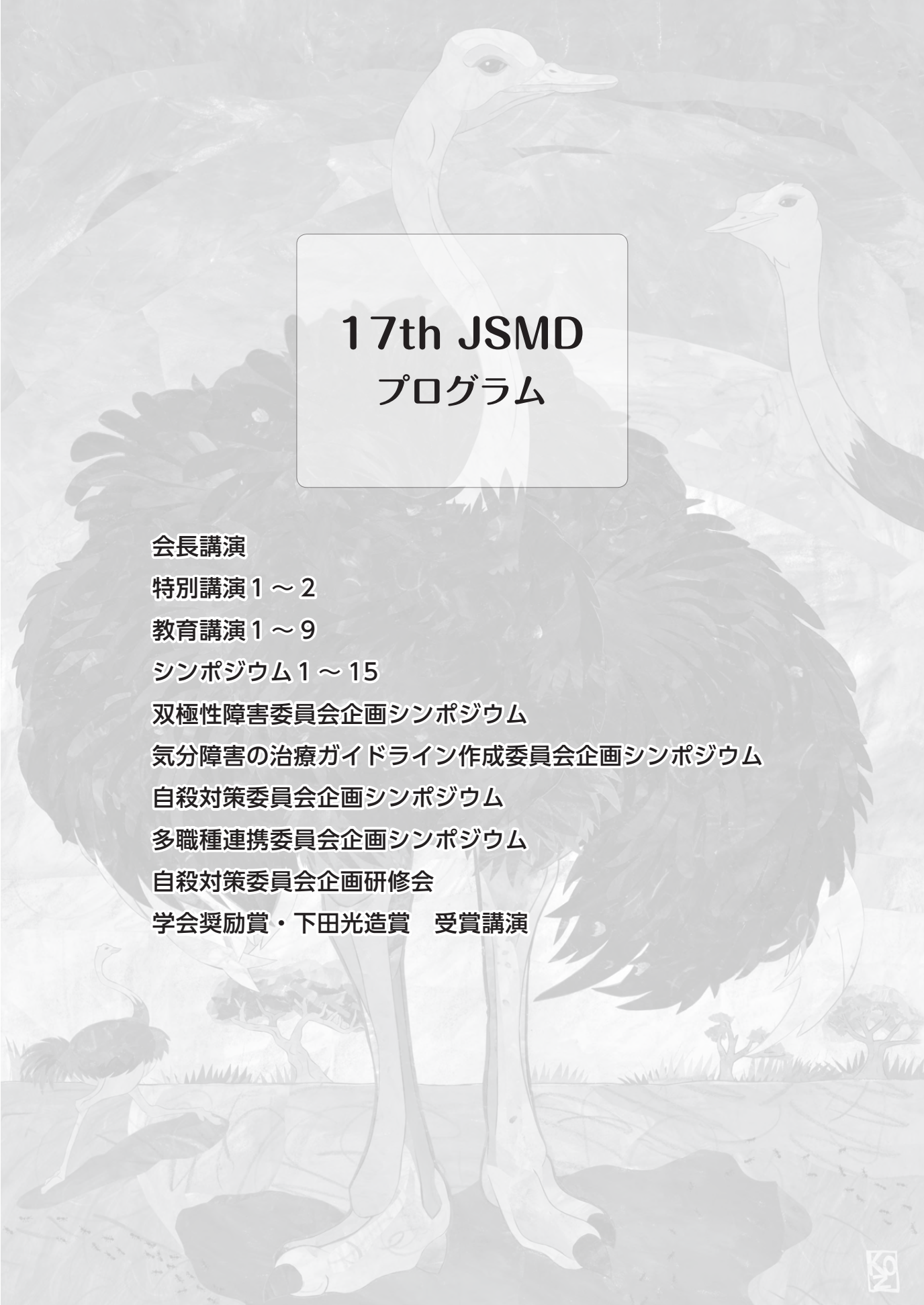




17th JSMD プログラム

会長講演

特別講演 1 ～ 2

教育講演 1 ～ 9

シンポジウム 1 ～ 15

双極性障害委員会企画シンポジウム

気分障害の治療ガイドライン作成委員会企画シンポジウム

自殺対策委員会企画シンポジウム

多職種連携委員会企画シンポジウム

自殺対策委員会企画研修会

学会奨励賞・下田光造賞 受賞講演

JSPN : 日本精神神経学会精神科専門医制度 単位対象セッション

会長講演

JSPN

オンデマンド配信

PL1 うつ病と免疫・炎症

座 長	大谷 浩一	山形大学医学部精神医学講座
演 者	吉村 玲児	産業医科大学医学部精神医学教室

特別講演 1

JSPN

オンデマンド配信

ILE1 保健教育とメンタルヘルスリテラシー

演 者	水野 雅文	東邦大学医学部精神神経医学講座
------------	-------	-----------------

特別講演 2

JSPN

オンデマンド配信

ILE2 うつ病治療のエビデンスを作る：メタアナリシスとメガトライアル

演 者	古川 壽亮	京都大学大学院医学研究科健康増進・行動学分野
------------	-------	------------------------

教育講演 1

JSPN

オンデマンド配信

EL1 外国人のメンタルヘルスへの支援

演 者	秋山 剛	NTT 東日本関東病院 精神神経科
------------	------	-------------------

教育講演 2

JSPN

オンデマンド配信

EL2 気分障害に対する適切な治療をめざして

座 長	吉尾 隆	東邦大学薬学部 医療薬学教育センター 臨床薬学研究室
演 者	野村 総一郎	六番町メンタルクリニック

教育講演3

JSPN

オンデマンド配信

EL3 気分障害の睡眠 update

座 長 明智 龍男

名古屋市立大学精神・認知・行動医学分野

演 者 内山 真

東京足立病院／日本大学医学部

教育講演4

JSPN

オンデマンド配信

EL4 こころとからだに働きかける臨床動作法によるうつの改善 ー能動的自己活動感と自己存在の確かな感じを目指してー

座 長 小嶋 秀幹

福岡県立大学 人間社会学部

演 者 鶴 光代

東京福祉大学 心理学部

教育講演5

JSPN

オンデマンド配信

EL5 言葉から「距離をとる」(バーバル・ディスタンス): アクセプタンス& コミットメント・セラピー (ACT) による予防的介入の提案

座 長 明智 龍男

名古屋市立大学精神・認知・行動医学分野

演 者 武藤 崇

同志社大学心理学部

教育講演6

JSPN

オンデマンド配信

EL6 職場結合性うつ病・双極性障害

演 者 加藤 敏

自治医科大学 名誉教授／小山富士見台病院

教育講演7

JSPN

オンデマンド配信

EL7 入門編；うつ病におけるプレシジョンメディシンの現状と今後

座 長 尾関 祐二

滋賀医科大学 精神医学講座

演 者 加藤 正樹

関西医科大学精神神経科学講座

教育講演 8

JSPN

オンデマンド配信

EL8 脳の個人特性を踏まえた精神疾患患者の運転技能評価と適切な対応

座 長 黒沢 雅広

昭和大学附属烏山病院 薬局

演 者 尾崎 紀夫

名古屋大学大学院医学系研究科 精神医学・親と子どもの心療学分野

教育講演 9

JSPN

オンデマンド配信

EL9 不眠症治療の最前線

演 者 三島 和夫

秋田大学大学院医学系研究科精神科学講座

シンポジウム1 メディアと取り組むこころのバリアフリー

JSPN

ライブ配信 1月27日(水) 11:30 ~ 13:30

オーガナイザー 秋山 剛

NTT 東日本関東病院 精神神経科

【趣旨・狙い】

メディアは、精神疾患への“イメージ”の形成に、大きな影響を持つ。犯罪と精神疾患とを紐付け誤解や偏見を助長する報道がある一方、当事者の姿や声を取り上げ精神疾患の正しい理解を促す報道もある。メンタルヘルスの関係者とメディアがよりよい協力関係を築けば、メンタルヘルスの課題に取り組む人が社会的なサポートを得やすくなると考えられる。本シンポジウムでは、当事者、メンタルヘルス関係者、メディア関係者が協力するための方向性について話し合う。シンポジウムの意義や海外の精神疾患報道ガイドラインについて慈圭病院の吉村優作氏、当事者として当事者取材を行っている立場から姫野桂氏、メディア関係者の立場からみた報道の影響について Buzz Feed Japan Medical の岩永直子氏、日本における精神疾患報道ガイドラインを作成する試みとその課題について、認定NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボの宇田川健氏から発表がある。本シンポジウムを通して、メンタルヘルスとメディアの関係についての包括的な理解が進み、メンタルヘルス関係者が、メディアとの関係をより積極的にとらえるきっかけになればと願う。

座 長 秋山 剛

NTT 東日本関東病院 精神神経科

増田 史

上林記念病院 精神心療科

SY1-1 メディアと精神医療

吉村 優作 慈圭病院

SY1-2 発達障害による生きづらさ、当事者として伝えたいこと

姫野 桂 フリーランスライター

SY1-3 メディアに内面化された「負の視線」を変える

岩永 直子 BuzzFeed Japan

SY1-4 「みんなで考える精神科報道ガイドライン」の適正化と、その課題

宇田川 健 地域精神保健福祉機構・コンボ

シンポジウム2 ひきこもりの包括的評価と病態・ステージに応じた支援

JSPN

オンデマンド配信（演者発表）＋ライブ配信（総合討論） 1月27日（水） 17:00～19:00

オーガナイザー 加藤 隆弘 九州大学大学院医学研究院精神病態医学

【趣旨・狙い】

社会的ひきこもり（以下、ひきこもり）は、6ヶ月以上にわたり、就労・学業など社会参加を回避し家庭内（自宅）にとどまっている現象（あるいは、その状態にある者）で、文化社会的影響が示唆される一方、何らかの精神疾患の併存が示唆される。内閣府の報告では110万人以上の存在が示唆されている。不登校からはじまる児童思春期のひきこもり、青年期のひきこもり、さらに最近では8050問題と呼ばれるように中高年のひきこもりも社会問題となっており、ひきこもり打開は喫緊の課題であるが、抜本的打開策はいまだ見出されていない。

本シンポジウムでは、はじめに、ひきこもり臨床と研究の第一人者である近藤が包括的アセスメントの重要性とその方法を紹介する。児童精神科医である宇佐美は、児童におけるひきこもりの特徴とその治療戦略を論じる。境は臨床心理学の立場から開発をすすめているひきこもり者本人およびその家族向けの支援法を紹介する。加藤は生物心理社会モデルに基づくひきこもり理解の重要性とその支援体制に触れるとともに、うつ病がひきこもりのリスク因子である可能性に言及する。

本シンポジウムの中で、ライフステージや病態に応じたひきこもり支援の課題が深く議論されることを期待している。

座 長 加藤 隆弘 九州大学大学院医学研究院精神病態医学
近藤 直司 大正大学心理社会学部臨床心理学科

SY2-1 ひきこもりケースの包括的アセスメント

近藤 直司 大正大学心理社会学部臨床心理学科

SY2-2 こどものひきこもり

宇佐美 政英 国立国際医療研究センター国府台病院 児童精神科・子どものこころ総合診療センター

SY2-3 ひきこもり本人と家族への心理的アプローチ

境 泉洋 宮崎大学教育学部

SY2-4 ひきこもりにおけるうつ病・発達障害の並存を考える

加藤 隆弘 九州大学大学院医学研究院精神病態医学

シンポジウム3 超高齢者のうつ病診療

JSPN

ライブ配信 1月28日(木) 9:00 ~ 11:00

オーガナイザー 三村 将

慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

【趣旨・狙い】

うつ病はあらゆる年代で生じうる病態である。もともと65歳以上の高齢者のうつ病は有病率も高く、臨床的に遭遇すること多いが、近年では社会の超高齢化を背景として、75歳以上、あるいは85歳以上といったさらに高齢のうつ病患者に遭遇することも稀ではない。本シンポジウムでは、このような超高齢者のうつ病に関して、どのように向き合うか、診断や治療においてどのような注意が必要かを改めて考える機会としたい。シンポジウムの演者は最近、本学会で作成した「高齢者のうつ病治療ガイドライン」の執筆者にお願いした。馬場 元先生には、高齢のうつ病患者の最大の特徴とも言える認知機能低下の視点から超高齢者のうつ病の臨床的特徴をまとめていただく。伊賀淳一先生と鬼頭伸輔先生には、超高齢者のうつ病の治療にあたって、薬物療法と修正型電気けいれん療法という治療的視点から注意点を述べていただく。最後に、超高齢者の心理特性について、最近トピックである主観的幸福感、サクセスフルエイジング、ウェルビーイングといった視点から三村が概説する。

座 長

三村 将

慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

馬場 元

順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院／順天堂大学大学院医学研究科精神・行動科学

SY3-1 超高齢者のうつ病と認知機能

馬場 元

順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院／順天堂大学大学院医学研究科精神・行動科学

SY3-2 超高齢者のうつ病に対する薬物療法

伊賀 淳一

愛媛大学大学院精神神経科学講座

SY3-3 超高齢者のうつ病に対する電気けいれん療法の現状と展望

山崎 龍一

東京慈恵会医科大学精神医学講座

鬼頭 伸輔

東京慈恵会医科大学精神医学講座／国立精神・神経医療研究センター

SY3-4 超高齢者の主観的幸福感

三村 将

慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

シンポジウム4

気分障害における鍼灸の可能性～ボトムアップ・ニューロモデュレーション～ Challenge of Acupuncture in Mood Disorder: Bottom-up Neuromodulation

JSPN

ライブ配信 1月28日(木) 11:20～13:20 ※後日、オンデマンド配信

オーガナイザー 中村 元昭

神奈川県立精神医療センター 東洋医学研究室／昭和大学発達障害医療研究所

【趣旨・狙い】

東洋医学の「心身一如」の考え方に基づいて、鍼灸はうつ病などの精神疾患に対しても一定の治療効果を有すると考えられている。世界保健機関(WHO)もうつ病鍼灸の有用性を指摘している一方で、その抗うつ効果について客観的指標を用いて検証することは容易ではない。方法論的な限界もあり、レギュラトリー・サイエンスの観点からはうつ病鍼灸のエビデンスが構築されたとは言い難い。しかし、鍼灸の生物学的メカニズムの背景には、皮膚(経穴)のポリモーダル受容器から求心性に中枢神経系を修飾するbottom-up neuromodulationのモデルが想定されており、脳幹、視床下部、大脳辺縁系への影響に関して知見が集積されつつある。

本シンポジウムでは、鍼灸のストレス応答制御への影響について、げっ歯類と気分障害患者のデータを比較しながら議論する。シャム円皮鍼を対照とした経穴刺激研究において、ラットへの円皮鍼留置によって血漿コルチコステロンが低下すること、さらに気分障害患者への円皮鍼留置によって唾液中コルチゾールの低下や、迷走機能の改善効果を報告したい。さらに、毫鍼を用いたオープン試験で、気分障害患者における抗うつ効果、抗不安効果について報告したい。世界の鍼灸事情を取材したNHKの山本氏をお招きして指定発言を頂き、精神科医療における鍼灸の意義を議論したい。

座長 中村 元昭
砂川 正隆神奈川県立精神医療センター 東洋医学研究室／昭和大学発達障害医療研究所
昭和大学医学部生理学講座生体制御学部門

SY4-1 円皮鍼治療の抗ストレス作用 ～種々のストレスモデル動物を用いた検討～

砂川 正隆 昭和大学医学部生理学講座生体制御学部門

SY4-2 麻酔ラットの大脳新皮質血流に対する鍼刺激効果のメカニズム

内田 さえ 東京都健康長寿医療センター研究所自律神経機能研究室

SY4-3 円皮鍼が気分障害のストレス応答性に及ぼす影響について

伊津野 拓司 神奈川県立精神医療センター／昭和大学医学部生理学教室

SY4-4 気分障害臨床における鍼灸の有用性

中村 元昭 神奈川県立精神医療センター 東洋医学研究室／昭和大学発達障害医療研究所

特別発言 山本 高穂 NHK エデュケーショナル 科学健康部

シンポジウム5 「新型／現代型うつ」概念を臨床精神医学・心理学および文化社会的観点から再構築する

JSPN

オンデマンド配信（演者発表）＋ライブ配信（総合討論） 1月29日（金） 16：00～18：00

オーガナイザー

加藤 隆弘

九州大学大学院医学研究院精神病態医学

【趣旨・狙い】

精神病理学者であった故・樽味伸が「ディスチミア親和型うつ」（いわゆる「現代うつ」）の概念を提唱してから15年の歳月が経った（樽味・神庭 2005）。従来、日本のうつ病プロトタイプは、下田光造が戦前に提唱した「執着気質」を特徴とする「メランコリー親和型うつ」であった。樽味は、従来のうつ病概念と対比する形で今世紀初頭より若年者を中心に急増してきた回避行動や自己愛傾向を特徴とする抑うつ症候群を「ディスチミア親和型うつ」と名付けた。精神科臨床（特にクリニック）・産業保健・学校保健などの現場でこうした症例（以下「現代うつ」と記す）に遭遇することは稀ではないが、いまだ有病率などの疫学データはなく、公式な診断基準やガイドラインは存在せず、現場において対応困難な状況は打開されていない。本シンポジウムでは、「現代うつ」の打開策を創出するために、精神診断学・精神病理学・生物学的精神医学の立場に加えて、社会心理学・医療人類学の立場から、課題を整理し、再構築する。彼らの漠然とした万能感、一方で虚弱なレジリエンスと低い自己効力感がどのような背景で生まれているのか、その気質が教育現場や職場環境で、どのような問題を生んでいるのか、その打開のために何をするべきか、といった議論の深まりを期待したい。

座 長

加藤 隆弘

九州大学大学院医学研究院精神病態医学

井原 裕

獨協医科大学埼玉医療センター こころの診療科

SY5-1 非定型うつ病と診断することの重要性－ 拒絶過敏性と不安・抑うつ発作

貝谷 久宣

和楽会 パニック症研究センター

SY5-2 Sickness behavior としてのうつ病

井原 裕

獨協医科大学埼玉医療センターこころの診療科

SY5-3 対人過敏と自己優先：心理学研究から見てきた新タイプ抑うつ

坂本 真士

日本大学文理学部心理学科

SY5-4 樽味の「ディスチミア親和型うつ」概念から出発した若年者の抑うつ症に関する多軸的臨床研究と治療法の提案

加藤 隆弘

九州大学大学院医学研究院精神病態医学

指定討論者 北中 淳子

慶應義塾大学文学部・社会学研究科

シンポジウム6 うつ病における炎症の役割

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー

岩田 正明

鳥取大学医学部脳神経医科学講座精神行動医学分野

【趣旨・狙い】

抗うつ薬による治療に対して一部の患者で効果を示さないことから、うつ病を改めて多角的に検討する必要がある。本シンポジウムでは、うつ病を「炎症」という切り口で、様々な視点から考察することを目的として設定した。炎症は、自己を守るために働く免疫システムによって引き起こされる。通常は外界からの攻撃に対する防御反応の結果であるが、時にこのシステムは異常を来し、正常な自己細胞や臓器を障害し、炎症性疾患を呈する。うつ病の引き金となるストレスもこの免疫システムによって炎症をひき起こし、神経ネットワークを障害してうつ病の病態に関与する可能性が示唆されている。このメカニズムについて、動物研究、あるいはヒトの血液を用いた橋渡し研究から考察する。また、全身の炎症性疾患がうつ病をしばしば合併するなど、末梢と中枢とが炎症によってリンクしている可能性が示唆されている。脳-腸相関に加えて脳-脾臓相関という驚くべき関係性からうつ病を考える。また、脳の炎症を司るグリア細胞は治療の標的となりえよう。新しい観点でのうつ病治療薬の開発について、その可能性を提示する。

座 長

岩田 正明

鳥取大学医学部脳神経医科学講座精神行動医学分野

古屋敷 智之

神戸大学医学研究科薬理学分野

SY6-1 ストレスによる炎症反応を引き金とした脳組織リモデリング

古屋敷 智之 神戸大学医学研究科薬理学分野

SY6-2 うつ病・自殺のミクログリア仮説解明のための橋渡し研究

加藤 隆弘 九州大学大学院医学研究院精神病態医学

SY6-3 ストレス性精神障害における脳-腸相関および脳-脾臓相関の役割

橋本 謙二 千葉大学 社会精神保健教育研究センター

SY6-4 うつ病動物モデルにおけるグリアの役割と新規抗うつ薬開発

相澤 秀紀 広島大学医系科学研究科神経生物学

シンポジウム7 うつ病を抱えて生きることを支えるケア

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー 小高 恵実

上智大学総合人間科学部看護学科

【趣旨・狙い】

うつ病を抱える人々は症状によりセルフケアが妨げられ、生活機能全般を維持することが困難になり、セルフケアの力を補う・維持する・高めるケアを必要とします。そこで本シンポジウムは「うつ病を抱えて生きることを支えるケア」をテーマに、患者様や障害者の生活への支援や家族支援について、様々な専門的側面から介入を行っている方々にご登壇頂きます。

谷口先生はクリニックで診察と同時に訪問診療にも積極的に取り組まれており、早坂先生はうつ病の作業療法分野では第一人者といっても過言ではない方です。河野先生は看護師として退院後を見据えた入院患者様のセルフケアへの介入を行っており、緑川先生はクリニックのリワークデイケアを通して地域におけるうつ病の患者様の生活を支援しています。

先生方の日頃のご活動をご紹介して頂くとともに、ご参加者の方々からのご意見やご質問を頂きながら、これからのうつ病患者への生活やセルフケア、ご家族へのより質の高い支援につなげられる様な意見交換ができれば幸いです。

座 長 小高 恵実

上智大学総合人間科学部看護学科

SY7-1 アウトリーチで見えてくるもの

谷口 研一朗 さが恵比須メンタルクリニック

SY7-2 うつ病治療における多職種チーム医療と作業療法 ー患者の“生きづらさ”によりそうー

早坂 友成 杏林大学保健学部作業療法学科／杏林大学医学部精神神経科学教室

SY7-3 退院を見据えた、生きることを支えるケア ～リエゾン精神看護の立場から～

河野 佐代子 慶應義塾大学病院 看護部・医療連携推進部

SY7-4 うつ病を抱える人の復職にむけたセルフケア支援

緑川 綾 東京慈恵会医科大学大学院看護学専攻博士後期課程／市ヶ谷ひもろぎクリニック

シンポジウム8 企業から見た精神科の診断書／企業との連携とうつ病治療

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー 徳永 雄一郎 不知火病院

【趣旨・狙い】

近年、第三次産業の時代への突入、IT化さらにはメンタルヘルスの法制化と変化が激しく、うつ病に対する社会の認識度は高まっている。その結果多くの勤労者が、専門医を受診する。勤労者がうつ病で初診する場合、就労の継続が可能かの判断が、休職者にとっては復職可否の判断が医療者に求められる。精神疾患休職者の過半数を占めるうつ病に関しては、その再発率や慢性化率の高さから、復職への厳しい現実も横たわっている。さらに若年層では他罰的傾向を示すことも多く、復職にあたって症状は回復しても自己の問題点を気づき内省に結び付きにくい点がある。これを企業側や産業医から見ると、復帰に関して精神科医が記載した診断書の曖昧さを指摘する声は少なくない。そこで今回はそれぞれ異なる立場からのシンポジストに、職場復帰と診断書の問題点について忌憚のない意見を出してもらうようお願いした。本学会の討論を通して、うつ病にかかわる医療者が社会のニーズに適切に対応できる機会になればと願っている。

座長 田中 理香 スタジオリカクリニック
市来 真彦 東京医科大学病院 メンタルヘルス科／東京医科大学 学生・職員健康サポートセンター

SY8-1 職場復帰支援は働き方の多様化にどう対応すべきなのか？

松本 桂樹 株式会社ジャパンEAPシステムズ／神奈川大学人間科学部

SY8-2 企業からみた産業医と主治医の役割

松下 満彦 不知火病院

SY8-3 うつ病治療における企業側からみた主治医との連携について ～職場復帰支援における課題～

尾池 千賀子 独立行政法人 労働者健康安全機構 熊本産業保健総合支援センター

シンポジウム9 災害とうつ ～多職種連携による被災者支援～

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー

藤吉 晴美

吉備国際大学心理学部心理学科

【趣旨・狙い】

2016年熊本地震、2018年西日本豪雨、そして2019年には台風15号、台風19号と、毎年のように我が国に相次いで大規模な自然災害が発生した。災害は、人々の日常の暮らしを瞬く間に一転させ、心身にもダメージをもたらす。これは異常な事態に対する正常な反応といわれており、多くの場合生活の再建とともに収束へ向かう。しかしながら中には精神的不調が長く続いたり、深刻化するケースもあり、適切な時期に適切な支援を行う必要がある。本シンポジウムでは、様々な職種の方に被災者支援のご経験をお話していただき、反応性うつ病をはじめとした精神的問題への適切な支援について多職種連携の視点から探っていく。

座 長

藤吉 晴美

吉備国際大学心理学部心理学科

SY9-1 一人一人の暮らしや命を大切にできる社会をみんなでめざす

高尾 茂子

吉備国際大学保健医療福祉学部看護学科

SY9-2 目に見えない災害との戦い：福島原発事故とコロナ禍

前田 正治

福島県立医科大学医学部 災害こころの医学講座

SY9-3 平成30年7月豪雨災害における岡山県公認心理師・臨床心理士協会の取り組み～倉敷市役所との連携を中心に～

西村 大樹

岡山大学

シンポジウム 10 宗教とうつ病

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー 張 賢徳

帝京大学医学部附属溝口病院精神科

【趣旨・狙い】

本シンポジウムのオーガナイザー（張）は精神科医であり、精神科臨床をやればやるほど、宗教や宗教的なものへの関心の深まりを禁じ得ない。人生の大きな不幸や挫折に見舞われ、うつ状態になっている人に対して、狭義の医学的治療だけでは不十分だと痛感することが多々ある。また、遷延するうつ状態にあって「何もやる気が起こらない」と言う人に対して、「この人に何か生きる目標や、依るべき思想信条があれば、前を向く力になるだろうに」と思うことが少なくない。あるいは、「何のために生きているのでしょうか？」と問われて、答えに窮することもある。宗教的なものを臨床現場に活かせないだろうか、と思う。欧米では、宗教 (religion) や宗教的なもの (religiosity) のストレス低減効果やうつ病予防効果、あるいは抗うつ効果の報告がいくつかなされている (*Oxford Textbook of Suicidology and Suicide Prevention*, 2009)。宗教は医学よりももっと複雑に人々の生活に絡むものであるから他国の結果をそのまま当てはめることはできない。現在の日本でどのような取り組みが可能であるのか、関連領域の第一人者の方々にご登壇いただき、議論を深めたい。

座 長 張 賢徳
島 蘭 進帝京大学医学部附属溝口病院精神科
上智大学グリーンケア研究所

SY10-1 Bio-psycho-social からみたうつ病

井上 猛 東京医科大学精神医学分野

SY10-2 汝自身を知れ：内省の病に関する医療人類学的考察

北中 淳子 慶應義塾大学文学部・社会学研究科

SY10-3 うつ病と日本人の宗教性

島 蘭 進 上智大学グリーンケア研究所

SY10-4 うつ病のサイコセラピー

丹野 義彦 東京大学総合文化研究科

シンポジウム 11 身体疾患とうつ病

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー 野村 総一郎 六番町メンタルクリニック

【趣旨・狙い】

もともと身体疾患がある患者に「抑うつ状態」が生じれば、精神科医は通常どおり、診断 → 治療 と展開することであろう。しかし、併発症としてのうつ病に「うつ病」「適応障害」等の確定診断をしたとしても、抑うつの重症度が評価できる以上の臨床的意味は薄いかもしれない。現状の診断学では残念ながら、治療反応性を強く反映するマーカーに乏しい。また一方ではDSM 5のC項目「そのエピソードは物質の生理学的作用、または他の医学的疾患によるものではない」をクリアできないケースが多数ある。

うつ病併発症の診断学にはこのような曖昧さがあるが、そこで精神科医に要求されることは、やはり治療論であって、診断へのこだわりではなく、臨床の現場で役立つ手段であろう。たとえば、確定診断が曖昧であっても抗うつ薬を投与してみたり、認知行動療法や心理療法を試してみたり、鎮静せざるをえなかったり、と様々の試行錯誤を強いられるはずである。本シンポジウムでは、典型的なうつ病併発疾患の基本的な知識と、現場におけるノウハウをご披露いただくことで、少しでも診断と治療の確度を上げることに寄りたい。

SY11-1 うつ病と身体合併症との相関関係

桑原 達郎 立川病院 精神神経科

SY11-2 がん患者のストレスとうつ病

清水 研 公益財団法人 がん研究会有明病院 腫瘍精神科

SY11-3 妊娠・出産とうつ病

鈴木 利人 順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院メンタルクリニック

SY11-4 うつ病とせん妄の鑑別

和田 健 広島市立病院機構 広島市立広島市民病院 精神科

シンポジウム 12 双極性障害における労災の考え方

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー

黒木 宣夫

東邦大学名誉教授／医療法人社団 宣而会 勝田台メディカルクリニック

【趣旨・狙い】

精神障害等による労災請求件数は毎年、過去最高を更新し、2018年度は1820件に達し、実際に労災認定された件数は同年度465件（前年度比41件減）であった。また厚生労働省の公表したデータを整理すると1999年～2016年までの期間に4572件が労災認定されており、気分感情障害は49.8%（2275）を占めている。

精神障害の労災認定の基本は、精神疾患発症の前6か月間に業務による強い心理的負荷が認められるかどうかと判断されるが、1)「特別な出来事」（明らかに強度の強い業務による心理的負荷）があること、2)「心理的負荷強」とされる具体的な出来事があることが事実として認定されると、業務に起因した精神疾患として労災認定される。しかし、双極性障害の躁病相に陥っているために不眠不休で過重労働した場合、あるいは、過重労働の後に躁病相へ転じた場合等、その病態が業務に起因すると判断できるかどうか、本来の内因性精神疾患としての双極性障害が顕在化しただけでは無いとの見解もあると思われる。本シンポジウムでは、双極性障害の病相に関する最新の知見、リワークプログラムをとうした同障害の見解、諸外国の同障害の休復職の判断等から双極性障害の労災認定に関する見解を検討する。

座 長

荒井 稔

東京臨海病院メンタルクリニック 精神科

永田 頌史

産業医科大学 産業生態科学研究所 名誉教授

SY12-1 双極性障害の当事者が抱えるストレス—さまざまな知見より—

渡邊 衡一郎 杏林大学医学部精神神経科学教室

SY12-2 双極性障害のリワークプログラムからみた労災患者

五十嵐 良雄 メディカルケア大手町

SY12-3 諸外国における復職支援の仕組み・復職可否の判断

田中 克俊 北里大学大学院医療系研究科医学専攻産業精神保健学

SY12-4 労災認定の業務上外の基本～特に双極性障害に関して～

黒木 宣夫 東邦大学名誉教授／医療法人社団 宣而会 勝田台メディカルクリニック

シンポジウム 13 双極性障害に対する多面的な治療

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー 寺尾 岳

大分大学医学部精神神経医学講座

【趣旨・狙い】

双極性障害の治療は、まずは心理教育や支持的療法および薬物療法により開始されるが、これらをもっても治療に難渋するケースが少なくない。そのような場合に、さまざまな補完的治療が必要となるが、このシンポジウムにおいては、概日リズムをコントロールすることを高江洲先生、サングラスで適度に光を遮断することを白浜先生、適度な運動をすることを堀先生、実存的アプローチで自分への優しさを高めることを坂井先生に、それぞれ解説していただく。

SY13-1 概日リズムをコントロールすることの有用性

高江洲 義和 杏林大学医学部精神神経科学教室

SY13-2 サングラス装用による気分安定化研究 (サングラスで適度に光を遮断することの有用性)

泉 寿彦 大分大学医学部 精神神経医学講座

SY13-3 運動の双極性障害治療における役割

堀 輝 社会医療法人北九州病院 北九州古賀病院／産業医科大学医学部 精神医学教室

SY13-4 双極性障害に対する実存的アプローチの試み

坂井 亜果里 鶴見台病院

シンポジウム 14 双極性障害の連続性 (子供から大人まで)

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー 白川 治

近畿大学医学部精神神経科学教室

【趣旨・狙い】

双極性障害の最初の症状は10代でみられることが少なくないと考えられている。しかし、実際に双極性障害と診断され治療が行われるのは成人になってからであることも多く、また、再発しやすいため治療が長期間に及ぶことになる。双極性障害の的確な診断と適切な治療を行うために、子どもから高齢者まで、その症状と経過の特徴、また、鑑別すべき疾患について知ることは重要である。本シンポジウムでは双極性障害に関して、1) 小児期から成人期にかけての症状や経過の特徴、2) 成人期から老年期にかけての症状や経過の特徴、3) 双極性障害と近年注目される成人の発達障害の関係、そして 4) 維持療法のありかたと留意点について理解を深めたい。

SY14-1 児童精神医から見た双極性障害の連続性

辻井 農亜 近畿大学医学部精神神経科学教室

SY14-2 成人期から老年期へと続く双極性障害の連続性

馬場 元 順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院／順天堂大学大学院医学研究科精神・行動科学

SY14-3 大人の発達障害と双極性障害の関係

太田 晴久 昭和大学発達障害医療研究所

SY14-4 双極性障害の寛解・回復後の治療

大串 祐馬 福岡大学医学部精神医学教室

シンポジウム 15

多職種キャリアプラン [専門性を発展させるキャリア形成の在り方]

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー

向笠 章子

広島国際大学大学院心理科学研究科 実践臨床心理学専攻

【趣旨・狙い】

保健医療職はそれぞれの専門分野において、サブスペシャリティや専門資格制度を発展させ、キャリアデザインの多様化に取り組んでいる。しかし、様々な課題も抱えており、キャリア開発がままならない現状もある。専門性の発展には、もちろん職種ごとの取り組みが必須である。加えて、職種を超えて課題を共有し、現状打破の視点や方法を検討し、キャリア開発の道筋づくりとその促進に向け協働することが、保健医療従事者のモチベーションを高め、チーム医療を推進し、保健医療の質を向上することにつながるであろう。そこで、本シンポジウムでは、心理、作業療法、看護、医学の専門家として教育・実践・研究の第一線でご活躍のシンポジストをお迎えし、各職種のキャリア開発の現状や取り組み、課題についてお話しいただく。そして参加者の皆様と共に保健医療職のキャリア開発の今後を展望したい。

座 長

向笠 章子

広島国際大学大学院心理科学研究科 実践臨床心理学専攻

野末 聖香

慶應義塾大学看護医療学部

SY15-1 病院心理職の職業的成長、キャリア形成について ～多職種の中で学ばせていただいたこと

花村 温子

埼玉メディカルセンター 心理療法室

SY15-2 作業療法士のキャリアプラン構築の現状と課題

香山 明美

東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科作業療法学専攻

SY15-3 精神看護専門職としてのキャリア開発 ーメンタル看護相談外来開設を通して考えるー

長谷川 雅美

新潟県立看護大学

SY15-4 精神医学教育の方向性：自らのキャリアの集大成

尾崎 紀夫

名古屋大学大学院医学系研究科 精神医学・親と子どもの心療学分野

双極性障害委員会企画シンポジウム

双極性障害の抑うつエピソードにおける診断・治療・回復

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー 寺尾 岳

大分大学医学部精神神経医学講座

【趣旨・狙い】

双極性障害の抑うつエピソードは、その診断、治療、回復のどれをとっても、一筋縄ではいかないことがしばしばある。今回のシンポジウムでは、診断に関してはうつ病と双極性障害の抑うつエピソードとの鑑別を井上先生にお願いし、薬物療法を加藤先生にお願いした。補完的治療として光調整療法を平川先生に依頼し、回復とくに職場復帰に向けての介入を手銭先生に依頼した。双極性うつ病の患者さんが、正しくそれと診断され、適切な薬物を投与されつつ、光調整を行い、復職に向けて回復していく道筋を、このシンポジウムを通して明らかにすることがねらいである。

- BS-1 **診断：うつ病との鑑別**
井上 猛 東京医科大学精神医学分野
- BS-2 **光調整療法：環境光から高照度光療法まで**
平川 博文 大分大学医学部精神神経医学講座
- BS-3 **双極性障害の回復援助をおこなう上でおさえておきたいこと**
手銭 宏文 産業医科大学精神医学教室／三菱重工業下関造船所
- BS-4 **双極性障害の抑うつエピソードにおける薬物療法**
加藤 忠史 順天堂大学医学部精神医学講座／
理化学研究所 脳神経科学研究センター 精神疾患動態研究チーム

気分障害の治療ガイドライン作成委員会企画シンポジウム

日本うつ病学会 うつ病及び双極性生涯ガイドラインの現在、そしてこれから

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー 渡邊 衡一郎 杏林大学医学部精神神経科学教室

【趣旨・狙い】

日本うつ病学会は、2011年に双極性障害ガイドラインを、2012年にうつ病ガイドラインを発表し、これまで改定してきている。

現在までに発表されている高齢者向けガイドライン、現在作成中の当事者・家族向けガイドライン、さらには大改定が始まった双極性障害ガイドラインについて、その概容について紹介する。

座長 渡邊 衡一郎 杏林大学医学部精神神経科学教室
松尾 幸治 埼玉医科大学医学部精神医学／埼玉医科大学病院 神経精神科・心療内科

GS-1 高齢者のうつ病治療ガイドライン

馬場 元 順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院メンタルクリニック

GS-2 当事者・家族向けのうつ病治療ガイドの紹介と今後のガイドライン改訂に向けて

坪井 貴嗣 杏林大学医学部精神神経科学教室

GS-3 双極性障害ガイドラインの概容

松尾 幸治 埼玉医科大学医学部精神医学／埼玉医科大学病院 神経精神科・心療内科

GS-4 躁病エピソード

本村 啓介 国立病院機構肥前精神医療センター

自殺対策委員会企画シンポジウム 臨床現場での自殺のリスク評価

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー 張 賢徳

帝京大学医学部附属溝口病院精神科

【趣旨・狙い】

自殺の問題は精神科臨床に深く関わる事柄であるのは勿論だが、精神科以外の臨床現場全般にも関係する大事な問題である。まずは、臨床に携わる人が皆、「自殺を防ごう」という意識を持つことが大切である。そして次に大切なことは、自殺の危険群の把握である。自殺のリスク評価は自殺の予見性にもつながる重要なテーマである。臨床現場で自殺のリスク評価がどのように行われているのか、行われるべきなのか、実際の日常臨床の目線から離れることなく議論を深めていきたい。自殺のリスク評価と自殺予防については訴訟の問題も視野に入れた議論が求められるため、本シンポジウムではその専門家にもご参加いただく。また、単に「自殺リスク評価＝自殺予防」という理解だけではなく、自殺のリスク評価を通して、治療関係を深め、治療を進展させることができるという臨床の視点にも触れたいと思う。

座 長

河西 千秋 札幌医科大学医学部神経精神医学講座

太刀川 弘和 筑波大学医学医療系 災害・地域精神医学

SS-1 臨床現場での自殺リスク評価 評価尺度のレビューと展望

白鳥 裕貴 筑波大学保健管理センター 精神科

SS-2 看護の現場での自殺リスク評価

小山 達也 東京女子医科大学看護学部精神看護学

SS-3 臨床現場での自殺リスク評価の実際

張 賢徳 帝京大学医学部附属溝口病院精神科

SS-4 法的観点からみた自殺リスク評価（自殺の予見可能性）

大磯 義一郎 浜松医科大学医学部法学教室

多職種連携委員会企画シンポジウム 産業領域におけるメンタルヘルスと多職種連携

JSPN

オンデマンド配信

オーガナイザー

向笠 章子

広島国際大学大学院心理科学研究科 実践臨床心理学専攻

【趣旨・狙い】

「働き方改革関連法」が施行されたことで労働環境の激変がはじまりました。長時間労働の是正、多様で柔軟な働き方の実現、雇用形態にかかわらず公正な待遇の確保等のための措置を講じることで、勤労者がそれぞれの事情に応じた多様な働き方を選択できるようになりました。その反面、短時間に集中して労働生産性を上げる働き方や、在宅勤務（テレワーク）など人的サポート体制のない中で成果を求められる働き方は「メンタル不調」を抱える勤労者にはマイナスに働く事もあります。

また、現行の終身雇用や年功序列・給与体系・福利厚生システムからの脱却は、正社員を優遇していた既得権をなくしていこうという動きになることが予想されます。

今回、労働環境激変の時代に「患者・治療者」という視点ではなく、「企業（職場）と勤労者」という視点で産業精神保健に関わる多職種がいかに連携し協同するベストプラクティスについて討論します。

座 長

向笠 章子

広島国際大学大学院心理科学研究科 実践臨床心理学専攻

山口 律子

日立キャピタル損害保険株式会社

CS-1 産業保健師として企業内からどう関わるか ～メンタル不調者への援助～

伊東 和恵

三菱電機株式会社九州支社

CS-2 地域活動の一環として行う産業領域における看護活動

中野 眞樹子

合同会社エムエムIMS / 一般社団法人日本地域ケアネットワーク

CS-3 産業領域で働く心理職として心がけていること ～精神健康不調者へのサポーターを繋ぐ～

川口 知子

三菱重工業株式会社人事労政部長崎人事労政グループ健康衛生チーム

CS-4 多職種治療の最大の課題は医師へ本音を伝えられるか

徳永 雄一郎

不知火病院

自殺対策委員会企画研修会

自殺が生じたあとのケア：患者や同僚を失った医療者・勤労者のケア

JSPN

ライブ配信 1月28日(木) 13:30～15:40

オーガナイザー 河西 千秋 札幌医科大学医学部神経精神医学講座

【趣旨・狙い】

自殺の予防、そして自殺の後に遺された人へのケアは、精神科、心理臨床、ないしは対人支援業務の中で重要な領域です。また、不意に生じた自殺事故等のメンタルヘルス事故後の対応は、職場における業務管理や労務管理、リスク管理上の課題でもあります。本研修会は、自殺事故後に生じるさまざまな課題を提示し、事故に遭遇した人、事故後に遺された人の反応と心理についてケース・スタディなどを通して学びます。そして、課題解決について、複数の観点からその方法論について学習します。

講師・ファシリテーター	河西 千秋	札幌医科大学
	小山 達也	東京女子医科大学
	太刀川 弘和	筑波大学
	津山 雄亮	札幌医科大学

※本研修会への参加は、事前登録制です。

定 員：30名
受講料：2,000円

学会奨励賞・下田光造賞 受賞講演

オンデマンド配信

座 長 三村 将

慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

1. 学会奨励賞

医学分野

P-30 うつ病における脳内 MAO-B 密度を特異的な PET リガンド [11C] SL2511.88 を用いての可視化研究

森口 翔 慶應義塾大学精神神経科学教室／トロント大学

医療保健分野

P-31 非定型うつ病の症状に関連する認知行動的要因：横断研究による標的変数の検討

古川 洋和 鳴門教育大学大学院心理臨床コース

2. 2020 年下田光造賞

KS Optimal dose of selective serotonin reuptake inhibitors, venlafaxine, and mirtazapine in major depression: a systematic review and dose-response meta-analysis

古川 壽亮 京都大学大学院医学研究科健康増進・行動学分野